おおいしだものがたり

~資料館資料編~

資料館で開催中の雛人形展の中から、今回は享保雛の衣装について考えてみたいと思います。

享保雛(男雛)の装束は多くの場合、東帯風であると紹介されます。この東帯とは、平安貴族の正装で、 公家文化を端的に示す衣装ともいえます。ただしあくまで東帯「風」であり、公家の衣装に似せてはいても

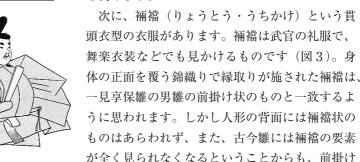


享保雛(男雛)

有職(宮中にまつわる伝統的な儀式や文化)とはいえません。享保雛の男雛に 特徴的な、前掛け状のもの(図1)は、実際の束帯には表れない形です。この 首下から前身頃全体を覆い、さらに帯の下まで垂れ下がるような様式は、どの ように生れたのでしょうか。 享保雛も含めて、現在も残る人形類を求めたのは、多くは裕福な商人たちで

した。一部の武家や公家を除けば、有職から遠い人々でしょう。そんな人々が 貴族の衣服を垣間見るのは、木版刷により庶民まで広がった百人一首カルタの ようなものではなかったかと思われます。そこにあらわれる公家たちの装束は 厚い布に糊を効かせた強装束(こわしょうぞく)と呼ばれるものです(図2)。

この強装束は上半身の前身頃が強調され、あたか もそれ自体が独立した衣服であるかのような印象 を受けます。



が全く見られなくなるということからも、前掛け 図2 強装束 状のものが即ち裲襠であるとはいえないようです。



図3 舞楽、蘭陵王の裲襠

ただし前述の強装束とも共通しますが、寺社境内で披露される舞楽もまた、有職を知らない人々にとっては 最も身近な装束の典拠となりえたのではないかとも考えられます。

以上のことをまとめると、享保雛にみられる前掛け状のものは、東帯の前身頃が絵画の強装東を三次元化 する際に、裲襠を参考にしながら形式化したものと考えられます。町屋の解釈が多分に含まれているとはい え、その根底にあったのは公家文化へのあこがれです。そしてこの意識は、人形の様式が変化しても色濃く 受け継がれていくことになります。享保雛の次に流行した「古今雛」の名は王朝文化への強い憧憬から付け られており、纏う衣装もより有職に近づいたものへと発展していくのです。

大石田雛人形展は4月4日(日)まで



携帯・スマホから アクセスできます

※この人数は外国人も含めたものです。

町の人口 令和3年3月1日現在

2.306戸 (-6) 総人口 6,690人 (-13) 3,296人 (-3)

3,394人 (-10) (2月中の異動)

出生 2人 転入 8人 死亡 15人 転出 8人